

令和 3 年 5 月 11 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2016～2020

課題番号：16H03404

研究課題名(和文)9、10世紀敦煌仏教、道教、民間信仰融合資料の総合的研究

研究課題名(英文) Study on Dunhuang manuscripts about Buddhism, Taoism and folk belief During 9th and 10th century

研究代表者

荒見 泰史 (Arami, Hiroshi)

広島大学・人間社会科学研究科(総)・教授

研究者番号：30383186

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 10,600,000円

研究成果の概要(和文)：本課題では、主として敦煌資料を中心資料とし、仏道二教及び民間信仰の角度から9、10世紀中国の生活と信仰について考察してきた。その際に解読した文献資料としては、主に 通俗文学文献(『劉家太子伝』、『董永変文』、『葉浄能詩』、『目連縁起』等)、儀礼の書(『大部禁方』、『水散食』、『呪食施一切面燃餓鬼飲水法』、『仏説十王経』)、符印を伴う資料(『観世音菩薩符印』、『(擬)観世音及世尊符印十二通及神符』、『観世音菩薩秘密無障礙如意心輪陀羅尼藏経一卷』)などであり、それらはテキストクリティーク、訳注作成とともにそれぞれについて研究を行い論文としてまとめている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究により、仏道二教の融合に民間信仰を加えた新たな切り口から研究が行われるようになった結果、敦煌文献中でこれまであまり注目が集められなかった文献、とくに道教や民間信仰に関わる通俗的文献の解読、翻訳、研究が進み、中国9、10世紀の社会生活、宗教活動についての理解が進んだ。こうした研究資料はすでに研究者間で共有されているほか、これらの研究資料をもとにして、尾道市平山郁夫美術館での企画展「敦煌」での上映用の記録映画の作成につながったほか、NHKの「東大寺修二会」に関する一連の記録番組などでの資料紹介や解説にもつながっている。

研究成果の概要(英文)：In this study, we have considered the life and beliefs of China in the 9th and 10th centuries from the angles of Buddhism, Daoism and folk beliefs, mainly using the Dunhuang manuscripts. The materials that were deciphered were mainly (1) Popular literary literature ( Liu Jia Taizi zhuan, Dongyong Bianwen, Ye Jingneng shi, Maudgalyayana Yuanqi, etc.), and (2) ritual books ( Dabu jinfang, Shuisanshi, Zhou shishi yiqie Mianran egui yinshi shui fa, the Ten Kings ), Materials with a mark (Guanshiyin pusa Mark, Guanshiyin ji Shizun In Shiertong ji shenfu, Guanshiyin-pusa Mimi wuzhangai ruyixinlun tuoluonizangjing ), etc. They are researched together with text critique and translation, and summarized as a treatise.

研究分野：中国文学

キーワード：敦煌 敦煌文献 仏教 道教 民間信仰 壁画 仏道融合 儀礼

## 1. 研究開始当初の背景

本課題は、主として敦煌の文献資料および壁画資料に見られる仏道二教の融合の状況、特に民間層に浸透して道教や民間信仰と融合した密教資料の整理を通じて、唐末期の社会変化、特に王朝を中心とする宗教の形から地方豪族や民と寺院の結びつきを中心とする形へと変化した時期における、9、10世紀に宗教が民へと接近し、通俗化していく流れについて考えることを中心とする。

こうした問題を精密に考えていくために、同時代の敦煌資料は研究資料の宝庫である。特に通俗化した密教資料はこれまであまり知られてこなかったが、実は数も多く同時代の民間層の宗教の状況を考える貴重な資料と言える。この際、敦煌文献と日本の同時代資料との比較を行い、密教儀礼や修験道の発展についても併せ考察することにより、より深い研究になると考えられる。

## 2. 研究の目的

研究代表者は、唐代後半にあたる9世紀中頃に始まる中央集権の衰退、それによる中国、日本をはじめとする東アジアで起こった社会変化、特に仏教界の社会における立ち位置の変化から、文学、芸能の発展を中心に研究を行ってきた。

この時代は、唐王朝による中央集権支配に代わって力をつけてきた地方軍事政権(帰義軍節度使など)及び荘園地主層と仏教界が急速に接近した時代である。そうした新しい富裕層に受け入れられるために、仏教者たちは語り物や讃歌、華やかな作法を取り入れた齋会、法会を盛んに行なうようになり、結果として通俗化された文学、芸能を多く生むようになったと見られる。こうした状況は中国ばかりではなく東アジア広域に共通して見られ、例えば日本においても最も中国の影響を強く受けた唐王朝の影響下から離れ、独自の文化を模索し始めた時代の中で、仏教文化を中心として日本の文学や芸能が活発化する時期にあたる。さらには、朝鮮半島においても同時代に同様の仏教の齋会を中心とする通俗文学、芸能発生の現象が起こっている。このように、この時代は東アジア各国文学発展における重要な時代と位置づけることができるのである。

こうした問題に関する研究代表者の最も早期の研究は、敦煌文献から発見された変文資料の調査が中心であった。変文とは、敦煌文献(1900年に莫高窟蔵経洞から発見された40000巻にも及ぶ10世紀以前の資料)中にたまたま発見された埋蔵資料であり、9、10世紀に使用されていた言語によって、或いは経典を改変し注釈を付したものの、或いは古典をもとに創作されたものを中心とする講唱文学(語り物)の文献群である。広義にいわゆる変文には、法会に用いられた経典注釈の講経文、孝道を宣揚するための変文、或いは単に娯楽のために歌われた変文などが多く残されており、まさに庶民文化を含む社会全体の変化を知ることのできる貴重な資料群と言える。

これらを基礎とした研究は、科学研究費補助金基盤研究(C)「敦煌文献中にみられる説話文学資料の基礎的研究」及び科学研究費補助金基盤研究(B)「敦煌文献中にみられる唱導資料の総合的研究」へと発展している。とくに研究代表者がポストドクター時に始めた中国と日本の間における思想、仏教儀礼の比較研究は、広島大学敦煌学プロジェクト研究センターの設立にも繋がり、現在では朝鮮半島を含む東アジア地域を領域とする各地域、各研究領域の研究者との連携研究の中で、広く東アジアの唱導資料の研究へと発展している。

現在、研究代表者及び連携研究を行う研究グループの研究は、日中韓及び欧米研究者との緊密な連絡に拠り、敦煌文献の整理翻刻作業とともに日本古抄本との比較などへと進み、敦煌の講経文と日本8、9世紀の『東大寺諷誦文稿』等や論義書との比較、中国と日本における仏教儀礼研究、日本中世仏教研究との比較検討へと進展し、広く東アジアの9、10世紀における変容とその後の発展を多角的に捉える研究へと発展している。そうした研究成果は「イリノイ大学 Religious Texts and Performance in East Asia」、「SOAS 研究集会前近代の日本における新たな法会・儀礼学の構築をめざして ことば・ほとけ・図像の交響」、「東アジア宗教文献国際研究集会」(第1回、第2回、第3回、第4回)、「第57回国際東方学者会議シンポジウム “日中『願文』の比較”」、「説話文学会50周年記念大会シンポジウム “説話と資料学、学問注釈 敦煌・南都・神祇 ”」などの開催や発表、議論へつながり、評価を得ていると考える。またこれらの成果は、中国においても注目を集めており、中国、台湾で定期的に開催されている国際敦煌吐魯番学会、中国俗文化国際研討会など様々な国

際学会で発表してきた。

こうした連携研究の中で、研究代表者は日本における密教、修験道とのかかわりから、敦煌資料に見られる密教と道教或いは民間信仰との融合の状況と、日本資料との類似性への気づきがあり、本研究の発展性に注目した。

本研究では、敦煌文献に見られる密教儀軌及び道教や民間信仰と融合した儀礼文書などを中心に収集、調査を行った後に注釈付きの資料集を作成し、それらを通じて9、10世紀当時の仏教儀礼が如何に行われ、通俗化し、それが如何に文学、芸能へと繋がったかについて調査研究することが目的である。より具体的には、研究代表者がこれまでに科学研究費補助金基盤研究(B)「敦煌文献中にみられる唱導資料の総合的研究」(研究課題番号:22320069)において進めてきた唱導文献の調査整理と分類目録、翻刻、挑戦的萌芽研究「9、10世紀東アジアにおける宗教儀礼と文学芸能発展に関わる研究の新展開」(研究課題番号:25580077)で進めてきた研究の継続的作業として位置づけ、これに新たに道教や民間信仰との関わりという観点を加え、敦煌の『大部禁方』、『水散食』、『仏説大輪金剛惣持陀羅尼法』、『三万仏同根本神秘之印法』、『観世音菩薩符印』等の密教と道教や民間信仰が融合した資料によって、前研究を基礎としたより発展的な研究へ拡大し、そして、壁画資料、出土資料などとの関連も含めて充実した資料集を作成することを目標とする。

本研究から新たに扱い、新しく翻刻及び注釈資料を作成してきた資料は、敦煌資料50点余りで、最終的には翻刻資料集を作成することである。なお、『受八關齋戒文』や『十王経』などのように、前研究で扱った資料の中にも密教の儀礼とのかかわりを指摘しうる文献もある。こうした文献は講唱文学作品として有名な変文にも及んでいることは研究代表者も早くから指摘しており、こうした資料と密教儀礼との関係を調査することにより、文学の発展の具体的状況を明かすよう努める必要がある。また、日本残存の密教資料、例えば『龍樹五明論』、『仏説金毘羅童子威徳経』、『宝蔵天女陀羅尼法』等の儀軌類との比較研究、注釈の作成を行い、9、10世紀当時に信仰された仏教と道教や中国民間信仰との融合の状況も明らかにしたいと考える。

なお、敦煌写本は図録などによって公開されているものも増えてきているので、翻刻作業の際においてはこれらも十分に利用する必要がある。実際の翻刻作業に際しては、研究代表者、研究分担者が行っていくほか、広島大学敦煌学プロジェクト研究センターの研究グループ、浙江大学古籍研究所、四川大学俗文化研究所、台湾国立政治大学スタッフなどの協力を得て、より充実した翻刻資料の作成を行う。

日本の同時代資料との比較も適宜行う。この点に関しては、上島享代表の科学研究費補助金基盤研究(B)「真言密教寺院の史料調査に基づく分野横断的総合研究」(研究課題番号:15H03165)、松尾恒一代表の国立歴史民俗博物館平成24年度共同研究「東アジアの宗教をめぐる交流と変容」、近本謙介「中世拠点寺院の蔵書と美術に基づく人と知のネットワーク解明」と連携し、日本国内や東アジアの民俗文化調査を行いつつ、適宜意見交換を行うなどして進める。

なお、同方面の研究では、李小栄氏『敦煌密教文献論稿』(人民文学出版社、2002年)等、蕭登福氏『道教道家影響下の仏教経籍』(新文豊出版公司、2005年)等数点の研究成果が見られているが、中でも敦煌資料を使った密教と道教や民間信仰の融合に特化した研究は皆無であった。現在もなお、浙江大学古籍研究所で進められている敦煌文献の翻刻資料集成である『敦煌文献合集』(中華書局)の編集作業においても、本研究に言うような唱導資料は依然として収録の対象に入っていない。そうした現状を受け、研究代表者は科学研究費補助金基盤研究(B)「敦煌文献中にみられる唱導資料の総合的研究」においてすでに調査を進め、『敦煌唱導資料研究』として報告書をまとめているが、しかし同研究で調査対象となった敦煌文献の他にも、密教と道教や民間信仰と融合した儀礼の書はまだ多くの重要な資料が残されていることが分かっており、同時代中国の宗教とその儀礼の変化から文学の発展へと繋がることを知りうるより網羅的な資料集成の作成を目指す。

### 3. 研究の方法

本研究においては、日本、中国、台湾、欧米の研究者と意思疎通を図りつつ、敦煌文献中の唱導資料(本研究ではとくに経典注釈書類、音楽資料を中心とする)の調査を連携して行い、9、10世紀の敦煌唱導資料の資料集成を作成する。その作業の基礎的な手順は以下の～である。敦煌の唱導文献、講唱文学研究に関しては、研究協力者である中国浙江大学古籍研究所の張涌泉氏、台湾南華大学鄭阿財氏らが中国、台湾における中心的研究者である。

また日本研究では上島享氏、松尾恒一氏はいずれも日本の仏教史研究、儀礼研究では代表的な研究者であり、彼らとの連携研究と継続的な意見交換のなかで、分類や体例について共通認識を構築していく。相互の連絡は電話や E-mail や、SNS などの通信方法によるほか、国際会議や研究打ち合わせなどの場で意思の疎通を図る。必要によっては個別に訪問して相談などを行う。

で得た分類と体例により、翻刻作業を行う。その際、敦煌文献はここ数年で写真資料が多く出版され、写真資料による基礎作業が益々容易になってきている。さらに原巻写本の修復整理も進み多くの所蔵機関で閲覧が可能な場合が多くなっているため、写真資料による時間をかけた後、所蔵機関での確認作業を行うことにより、より効率的で精密な作業を進めることができるようになった。翻刻作業は広島大学と明海大学で行うほか、経験の豊富な浙江大学古籍研究所、四川大学俗文化研究所、国立政治大学の協力によって質量ともに高い作業が可能となる。現地での原巻写本との校合作業は研究代表者、研究分担者や海外の研究協力者が行うものとする。

によって集められた翻刻資料は研究代表者、研究分担者と海外の研究協力者によってとりまとめ、最終的には電子データとして公開できる状態にまで仕上げる。公開の方法は、ホームページなどを利用するほか、SNS などで配布する。また、研究成果の社会への還元については、新たな知見を論文として雑誌に掲載するという従来型の方法に加え、SNS を利用した配布方法により拡散する工夫を行う。また論文成果を映像化し、Youtube などでの配信を行う。

#### 4. 研究成果

2016 年度は、研究計画に基づき、意見交換、資料の収集、翻刻作業、現地調査、進捗状況の確認の 5 項目を中心に研究を進めた。とくに翻刻作業においては『覚禅鈔・施諸餓鬼』と敦煌本 BD5298『呪食施一切面燃餓鬼飲食水法』並『結壇散食迴向發願文』の比較検討や敦煌本『大部禁方』の比較検討を進め「敦煌的施餓鬼法與日本蔵《覚禅鈔・施諸餓鬼》 BD5298《呪食施一切面燃餓鬼飲食水法》並《結壇散食迴向發願文》解題附校録」と、「從密教儀軌的演變來探討中唐期的宗教儀禮——以敦煌本《大部禁方》為中心」として海外で刊行されることが決まっている。また現地調査では、香港の盂蘭勝会を調査して唐代の盂蘭盆や施餓鬼との状況を比較検討し、奈良薬師寺の慈恩会の調査では、唐前期の儀礼との検討を進めることができた。また進捗状況の確認としては、7 月 29 日と 11 月 13 日の 2 回、「仏教の東漸と西漸」（広島大学開催）、「法会の史料と儀礼」（京都大学開催）として国際研究集会を開催し、検討を進めることができた。こうした研究を基盤として、「『大目乾連冥間救母變文』の書き換えと「經典化」」（『敦煌写本研究年報』第 11 号、23-38 頁、2017 年 3 月（査読有り））、「香港の盂蘭勝会の現状と餓鬼供養」（『アジア社会文化研究』第 18 号、1-33 頁、2017 年 2 月（査読有り））、「敦煌本『仏説諸經雜緣喻因由記』と唱導」（『国立歴史民俗博物館報告』第 188 集、125-146 頁、2017 年 3 月。（査読有り））、「中国仏教と祖先祭祀」（『宗教と儀礼の東アジア』、勉誠出版、34-59 頁、2017 年 3 月。（査読有り））のような数点の論文を刊行することもできた。

2017 年度、研究代表者と研究分担者は、海外の研究協力者とスカイプ、E-mail、国際電話等で個別に連絡を取り合い、継続的に研究資料や分析についての意見交換を行ってきた。資料の収集としては、広西師範大学出版社『英国国家図書館蔵敦煌遺書』などの敦煌写本や西域壁画資料などの図録で、新たに刊行されたものや、現在広島大学が所蔵していないものについては逐次収集してきた。

翻刻作業としては、主として研究代表者、研究分担者が本研究上必要とみられる資料を敦煌文献中から検索し、さらに意見交換等により選定、分類し目録作成と翻刻の準備を進め、調査の完了したものについては随時出版公開してきた。現地調査としては、敦煌文献の調査としては、研究分担者がフランス国家図書館の調査を行った。他に、四川大学の協力で西南地域の石刻資料の調査を行い、また台湾国立中央大学の協力で台北、台南の寺院における儀礼、民間信仰融合の状況についての調査を行った。進捗状況の確認としては、年度内に研究代表者、研究分担者、海外の研究協力者、連携研究者などで、随時連絡を取りあってきた。また、本年度は国際研究フォーラム広島大学、首都師範大学、絲綢之路と“一帯一路”學術研討会「東西を旅した聖人とその声跡」（2017 年 7 月 29 日、平山郁夫美術館開催）を開催し、活発な議論を行うこともできた。さらに、10 月には研究協力者が四川大学で主催した国際学会にも出席し、議論を行うことができた。

2018年度は、引き続き意見交換、資料の収集、翻刻作業、現地調査、進捗状況の確認を中心に行ってきた。意見交換は、研究代表者と研究分担者は、引き続き海外の研究協力者、国内の研究協力者らとスカイプ、E-mail、国際電話等で個別に連絡を取り合い、研究資料や分析についての意見交換を行ってきた。そのほか、研究代表者は北京及び台北に2-3週間滞在し、現地の研究協力者と綿密な相談を行うことができた。資料の収集についても、北京、台北滞在時に現地資料を確認することができた。また敦煌写本や日本資料の写真資料や翻刻資料集を継続的に購入している。翻刻作業は主として研究代表者により、関連文献の訳注作成が進んでいる。現地調査は、本年度は香港の孟蘭勝会の調査など、今日に残される仏道の融合する儀礼を民俗学的角度からの検討を行った。進捗状況の確認としては、7月に広島大学で「中国伝統教育と東アジア」と題する国際シンポジウムを開催したほか、9月浙江大学、9月國學院大學、11月広島大学(道教学会)などで研究発表を行い、それぞれ研究成果の確認を行った。

2019年度は、引き続き意見交換、資料の収集、翻刻作業、現地調査、進捗状況の確認を中心に行ってきた。意見交換は、研究代表者と研究分担者は、引き続き海外の研究協力者、国内の研究協力者らとスカイプ、E-mail等で個別に連絡を取り合い、研究資料や分析についての意見交換を行ってきた。そのほか、研究代表者は北京に2週間、台北に2週間、敦煌に10日程度間滞在し、現地の研究協力者と綿密な相談及び共同調査を行うことができた(ただし、コロナ・ウイルス蔓延により2-3月の計画は中止になった)。資料の収集についても、北京、台北滞在時に現地資料を確認することができた。また敦煌写本や日本資料の写真資料や翻刻資料集を継続的に購入している。翻刻作業は主として研究代表者を中心に、関連文献の訳注作成が進んでいる。現地調査は、本年度は文献調査では大英図書館、国内の和泉市久保惣美術館、平山郁夫美術館での調査を行い、石窟の調査では、四川省の石刻資料及び敦煌調査をおこなった。進捗状況の確認としては、5月嘉義大学、7月四川大學、8月龍谷大学、10月国立政治大学、11月国立中興大学などで研究発表を行ったほか、それぞれ研究成果の確認を行った7月に広島大学で「伝えられた声とその廻響き」と題して研究分担者、研究協力者とともに国際シンポジウムを開催した。

また本年度は広島県尾道市の平山郁夫美術館と協定をおこない、研究活動内容発表の場としての協力を得ることができた。

2020年度は、最終年度として、過去の5年間で行ってきた資料集の最終的な整理、研究成果の整理を主として行った。

基礎作業として引き続き行っている文献翻訳訳注作業としては、「葉浄能詩」全編の訳出を新たに行ったほか、「劉家太子伝」、「董永変文」、「目連縁起」、「茶酒論」等の前年度までにすでに訳出された文献の注釈の整理を進めた。これらは他に「韓朋賦」、「晏子賦」、「燕子賦」、「地獄変文」、「歡喜国王縁」、「漢将王陵」等とも合わせ、これまでに未訳の変文と共に翻訳資料集として公刊する準備を行っている。また敦煌文献のデジタル資料化作業としては、儀礼文書の願文類、敦煌文献の題記部分、敦煌講唱文学文献および注釈部分のデジタル化作業はひと段落を迎えることができた。講文類、儀軌類は資料が膨大であるが、研究上きわめて簡便な検索が可能となったことは大きな成果と考えている。以上の資料に基づく研究会での発表と研究論文作成を行った。これらは整理後に公開される。

以上の研究の公開作業としては、本年度は2016年度、2017年度に本研究課題の中で開催した国際研究集会発表論文を整理し、『仏教の東漸と西漸』(勉誠出版)として出版することができた。また本年度も例年通りに国際研究集会を主催し(「敦煌と東アジアの信仰」8月1日、広島大学)オンラインによる海外の市民講座「永嘉大師著作国際版本展/東亜文化交流活動(温州市文化広伝旅游局・温州市人民政府外事弁公室主催)」への出演、オンライン国際学会「2020 仏教文献与文学国際学術研討会(国立政治大学主催)」での発表、討論を行った。ほかに特記すべきことは、尾道市平山郁夫美術館での企画展用に新たな研究成果を含む記録映画を作成し、NHKの一連の記録番組「東大寺修二会」などでの敦煌資料の提供や解説も行い、研究成果を社会に還元できたことである。それらも含め、作成された映像はYoutube局を開設し、随時公開される。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計25件（うち査読付論文 16件 / うち国際共著 2件 / うちオープンアクセス 9件）

1. 著者名 荒見泰史	4. 巻 251
2. 論文標題 仏教の東漸と西漸	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 アジア遊学	6. 最初と最後の頁 4-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 荒見泰史	4. 巻 251
2. 論文標題 頌讃の文学	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 アジア遊学	6. 最初と最後の頁 23-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 荒見泰史	4. 巻 251
2. 論文標題 信仰における画像と継承	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 アジア遊学	6. 最初と最後の頁 96-128
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 荒見泰史	4. 巻 22
2. 論文標題 和泉市久保惣記念美術館『仏説十王経』について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 アジア社会文化研究	6. 最初と最後の頁 1-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 荒見泰史	4. 巻 15
2. 論文標題 S.2204 『(擬)董永変文』再考	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 敦煌写本研究年報	6. 最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14989/DunhuangNianbao_15_1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 松尾恒一	4. 巻 251
2. 論文標題 明代、南シナ海の海盜の活動と記憶 日本・中国大陸・東南アジアの宗教史跡をめぐって	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 アジア遊学	6. 最初と最後の頁 69-95
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松尾恒一	4. 巻 251
2. 論文標題 清代前期、媽祖信仰・祭祀の日本伝播とその伝承 ヨーロッパの東アジア進出を視野に入れて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 アジア遊学	6. 最初と最後の頁 226-244
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 荒見泰史	4. 巻 14
2. 論文標題 敦煌の民間信仰と佛教、道教 佛教文獻にみられる符印を中心として	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 敦煌寫本研究年報	6. 最初と最後の頁 51-67
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 王シン発・松尾 恒一	4. 巻 216
2. 論文標題 戦前・戦中の、マレー半島進出と日本仏教 - ゆがめられた真如親王の事跡	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 歴博	6. 最初と最後の頁 1-5
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松尾恒一・原山浩介・秋山かおり	4. 巻 22
2. 論文標題 鼎談 ハワイの日系人と太平洋戦争	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 歴史研究の最前線	6. 最初と最後の頁 52-71, 455
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松尾恒一・王シン発	4. 巻 8
2. 論文標題 戦前・戦中の、日本のマレー半島進出と日本仏教 半島の日本人の生活と真如親王の事跡	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 儀礼文化学会紀要	6. 最初と最後の頁 163-178
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松尾恒一	4. 巻 43
2. 論文標題 日本民俗中的の佛教儀礼与芸能	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 長江大学学报 (社会科学版)	6. 最初と最後の頁 17-24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 荒見泰史、桂弘	4. 巻 13
2. 論文標題 浄土念仏法事と変文	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 敦煌写本研究年報	6. 最初と最後の頁 133-148
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 荒見泰史、桂弘	4. 巻 20
2. 論文標題 指鬘と鬘、華鬘	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 アジア社会文化研究	6. 最初と最後の頁 25-42
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 松尾恒一	4. 巻 4
2. 論文標題 明清時期中国東海、南海の海盜活動と記憶	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 南国学術 (澳門大学文科学報)	6. 最初と最後の頁 621-631
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 松尾恒一	4. 巻 11-4
2. 論文標題 柳田国男と表演芸術研究 (柳田国男と芸能研究)	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 文化芸術研究	6. 最初と最後の頁 152-164
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 荒見泰史	4. 巻 12
2. 論文標題 唐王朝における三夷教と讃	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 敦煌写本研究年報	6. 最初と最後の頁 1-26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 荒見泰史	4. 巻 19
2. 論文標題 『心経』と「心」「経」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 アジア社会文化研究	6. 最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 荒見泰史	4. 巻 1
2. 論文標題 従密教儀軌の演変来探討中唐期的宗教儀礼 以敦煌本《大部禁方》為中心	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 絲綢文明的伝承与発展	6. 最初と最後の頁 488-504
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 荒見泰史	4. 巻 6
2. 論文標題 敦煌的施餓鬼法與日本藏《覺禪鈔、施諸餓鬼》 BD5298《呪食施一切面燃餓鬼飲食水法》並《結壇散食 迴向發願文》解題附校録	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 出土文献研究視座與方法	6. 最初と最後の頁 159-182
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 荒見泰史	4. 巻 1
2. 論文標題 漢語口訣文化与敦煌的識星詩	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 童蒙文化研究	6. 最初と最後の頁 64-82
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 荒見泰史	4. 巻 11
2. 論文標題 『大目乾連冥間救母変文』の書き換えと「經典化」	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 敦煌写本研究年報	6. 最初と最後の頁 23-38
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 荒見泰史	4. 巻 18
2. 論文標題 香港の孟蘭勝会の現状と餓鬼供養	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 アジア社会文化研究	6. 最初と最後の頁 1-33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 荒見泰史	4. 巻 188
2. 論文標題 敦煌本『仏説諸経雜縁喩因由記』と唱導	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 国立歴史民俗博物館報告	6. 最初と最後の頁 125-146
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 荒見泰史	4. 巻 206
2. 論文標題 中国仏教と祖先祭祀	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 アジア遊学	6. 最初と最後の頁 34-59
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計23件 (うち招待講演 14件 / うち国際学会 17件)

1. 発表者名 荒見泰史
2. 発表標題 敦煌莫高窟とその原始
3. 学会等名 敦煌と東アジアの信仰 (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 荒見泰史
2. 発表標題 和泉市久保惣美術館蔵『仏説十王経』調査報告
3. 学会等名 敦煌と東アジアの信仰 (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 荒見泰史
2. 発表標題 玄覚『証道歌』与『禅宗永嘉集』在日本的伝播
3. 学会等名 永嘉大師著作国際版本展/東亜文化交流活動 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 荒見泰史
2. 発表標題 法華信仰及其日本靈驗記
3. 学会等名 2020 仏教文献与文学国際學術研討会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 松尾恒一
2. 発表標題 孤魂と面然祭祀の歴史的展開/宗教儀礼の伝播と面然像の変化に注目して
3. 学会等名 敦煌と東アジアの信仰（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 荒見泰史
2. 発表標題 大足石刻與十王信仰
3. 学会等名 第五屆宋代學術國際研討會（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 荒見泰史
2. 発表標題 S.2204《董永變文》再考
3. 学会等名 絲綢之路寫本文化與多元文明國際學術研討會（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 荒見泰史
2. 発表標題 敦煌三危山考
3. 学会等名 中國俗文化國際學術研討會（招待講演）（國際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 荒見泰史
2. 発表標題 敦煌の民間信仰と佛教、道教
3. 学会等名 中国中世写本研究夏季大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 荒見泰史
2. 発表標題 " Xin(心) " and " Xing-jing(心經) "
3. 学会等名 International Conference on Dunhuang Studies&middot;Cambridge 2019（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 荒見泰史
2. 発表標題 敦煌本S.4654卷子寫本中の“變文”及其用途
3. 学会等名 出土文獻國際研討會（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 荒見泰史
2. 発表標題 敦煌の西王母信仰
3. 学会等名 第13届通俗文學與雅正文學 文學と信仰 國際學術研討會（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 荒見泰史
2. 発表標題 山岳の形像與敦煌
3. 学会等名 中華炎黄文化研究会童蒙文化委员会第五届國際學術研討會（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 荒見泰史、桂弘
2. 発表標題 唐代浄土念仏法事与变文
3. 学会等名 日中写本文献學術研討會（招待講演）（國際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 荒見泰史
2. 発表標題 信仰における圖像とその継承
3. 学会等名 日本道教学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 松尾恒一
2. 発表標題 香港坪洲島的中元建jiao考察
3. 学会等名 第四届(2018年)國際媽祖文化學術研討会(招待講演)(國際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 荒見泰史
2. 発表標題 頌讚の文学
3. 学会等名 國際研究フォーラム 広島大学、首都師範大学絲綢之路と“一帶一路”學術研討会「東西を旅した聖人とその声跡」(國際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 荒見泰史
2. 発表標題 摩尼教《下部讚》與佛教儀礼的轉化
3. 学会等名 2017 Dunhuang Forum: Inheritance and Innovation-;An International Conference on Dunhuang and the Silk Road in Memory of the 100th Anniversary of the Birth of Mr. Duan Wenjie(國際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 荒見泰史
2. 発表標題 敦煌三危山考(2017年版)
3. 学会等名 2017韓国敦煌絲綢之路学國際學術研討会(國際学会)
4. 発表年 2017年

1. 發表者名 荒見泰史
2. 發表標題 論中国宗教的特徵及其融合 以景教、摩尼教的讚美歌与淨土讚的關係為主探討
3. 学会等名 通俗文学与雅正文学与;唐代文化國際學術研討会 (招待講演) (國際学会)
4. 發表年 2016年

1. 發表者名 荒見泰史
2. 發表標題 敦煌的施餓鬼法與日本藏《覺禪鈔·施諸餓鬼》 BD5298《呪食施一切面燃餓鬼飲食水法》並《結壇散食迴向發願文》解題附校錄
3. 学会等名 近現代出土文献研究視野与方法國際學術研討会 (招待講演) (國際学会)
4. 發表年 2016年

1. 發表者名 荒見泰史
2. 發表標題 敦煌三危山考
3. 学会等名 2016敦煌論壇：交融與創新 紀念莫高窟創建1650周年國際學術研討会 (國際学会)
4. 發表年 2016年

1. 發表者名 Arami Hiroshi
2. 發表標題 The Dunhuang Manuscript of the Chajiulun and Comic Theatrical Performances at Buddhist Assemblies
3. 学会等名 International Scholarly Conference "The Written Legacy of Dunhuang" (招待講演) (國際学会)
4. 發表年 2016年

## 〔図書〕 計2件

1. 著者名 荒見泰史	4. 発行年 2020年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 244
3. 書名 仏教の東漸と西漸	

1. 著者名 松尾恒一	4. 発行年 2019年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 288
3. 書名 日本の民俗宗教	

## 〔産業財産権〕

## 〔その他〕

-

## 6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	遊佐 昇  (Yusa Noboru)  (40210588)	明海大学・外国語学部・教授   (32404)	
研究分担者	松尾 恒一  (Matsuo Koichi)  (50286671)	国立歴史民俗博物館・大学共同利用機関等の部局等・教授   (62501)	
研究分担者	上島 享  (Uejima Susumu)  (60285244)	京都大学・文学研究科・教授   (14301)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	桂 弘  (Gui Hong)  (80643022)	広島工業大学・情報学部・准教授    (35403)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計6件

国際研究集会 国際研究集会「伝えられた声とその廻響き」	開催年 2018年～2018年
国際研究集会 中国伝統教育と東アジア	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 東西を旅した聖人とその声跡、国際研究フォーラム 広島大学、首都師範大学絲綢之路と “一帯一路” 学術研討会「東西を旅した聖人とその声跡」	開催年 2017年～2017年
国際研究集会 仏教の東漸と西漸	開催年 2016年～2016年
国際研究集会 法会の史料と儀礼	開催年 2016年～2016年
国際研究集会 敦煌と東アジアの信仰	開催年 2020年～2020年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
中国	首都師範大学	四川大学	山東師範大学	
その他の国・地域（台湾）	国立政治大学	国立中興大学		